

幼年教育研究施設創立50周年を祝して

中央大学 鳥光美緒子

設立50周年、おめでとうございます。

幼年教育研究施設が創設された1960年代、70年代当時のわが国の幼児教育界は、アメリカの幼児教育界の影響を強く受けていた時代だったと記憶しています。早期教育ブームのきっかけともなったヘッド・スタート計画は、幼児教育の方法や内容を変えただけではなく、研究の側面でも、研究開発、R&Dの手法を幼児教育領域に導入するという変化をもたらしました。今になって振り返りますと、「研究施設」と大学院とが合体した組織が、広島大学に誕生したということの背景には、そのような、研究開発を志向する研究動向がわが国にもあったということなのだろうと推測しています。

幼研、と略称でいわせていただきたいのですが、幼研に赴任した当時、テキスト解釈という、古典的な研究方法になじんでいた私にとって、附属幼稚園に毎週でかけて、そこでの観察と記録を中心にした大学院の授業科目があるということ自体が、目新しいものでした。

言葉でいえば、学際的アプローチということになるのでしょうか、教育学や心理学、保健学といった、通例の研究キャリアでは見知ることのできない諸研究やその方法に身近に触れることができたこと、また小規模施設ならではの利点だと思われませんが、教員、院生、そして附属幼稚園の先生方をもまきこんだごく親密な関係があったこと、これらのことは、教員にも、また院生たちにとっても、刺激的な研究環境を構成する重要な要素でしたし、また現在でもその優れた研究環境は存続していることだろうと思います。

私が幼研に在籍していた当時、附属幼稚園の先生方や院生たちと共同で行った研究プロジェクトの一つに、プロジェクト保育の試みがあります。レッジョ・エミリアの幼児教育に触発されたものだったのですが、数年前、幼児教育史学会でプロジェクト保育をテーマとするシンポジウムが開かれたおりに、その試みについて話をしてほしいという依頼を受けました。久々に当時の資料を読み返してみても、当時、あのような研究プロジェクトが成立しえたのは、附属園と研究施設との、設立当初以来の密接な関係があって初めて可能になったことであつたと、あらためて感じさせられました。

幼研の設立の時期は、国全体をまきこんで第三の教育改革が話題になっていた時期と重なります。その当時、声高に議論されていた教育システムの全面的な改革は、今日、もちろんその内容については大きく変化させてですが、乳幼児期の教育・保育双方の領域をまきこんで、静かに、そして着実に進展しているように感じられます。広い視野をもって幼年期にかかわる研究者、実践者がますます必要になってくるでしょう。研究に、人材育成に、幼年教育研究施設のますますの発展を祈念します。